

全電源喪失の記憶

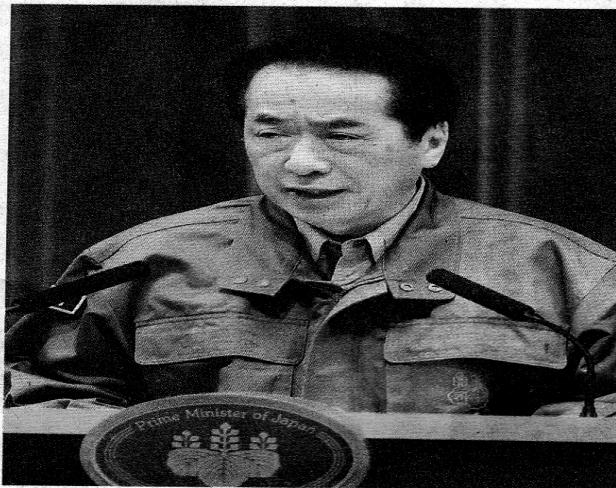
証言 福島第1原発
菅直人首相

■ 第1章「3・11」

11

刻々と悪化する事態

首相官邸の迷走



「どういう状況なんだ」「原発はうなるんだ」。官邸5階の執務室、首相の菅直人(64)はいらついてい。『君は原子力の専門家なのか』。荒らげる菅に原子力安全・保安院長の寺坂信昭(57)は「私は東大経済学部出身です。専門家ではありません」と返すのがやっとだった。

官邸では東日本大震災の被災者救に向け、緊急災害対策本部が史上初めて設置された。そこに東京電力島第一原発で原子炉が冷却不能と報告が飛び込んできた。

「私は背筋が寒くなる思いがしたけで、とにかく状況を聞きたい

と思つたわけ。だけど事故の時に原子炉のことが分かつてない人が説明に来たって、聞いている方は分かるわけがない」

菅は東工大理学部で応用物理学を学んだ。冷却機能を失えば、炉心溶融に至ると容易に想像できたといふ。「原発は俺が見なきゃいけん」。他の閣僚任せにはできないと気を高ぶらせていた。

同じころ、原子力安全委員会委員長の班自春樹(62)は、官邸4階の大會議室前の広い廊下で延々と待ち続けていた。原発で重大事故があれば

命運を握る立場に立つことになる。

だが班自は楽観的すぎた。時間を追うごとに事態は悪化していく。東電から派遣された原子力部門の元最高責任者武黒一郎(64)とともに首相執務室に呼び出された。

菅は「どうなるのか予測を出せ」と迫

る菅に、2人は返答に窮した。東電本店からの情報は断片的で、保安院からは原発の図面すら届かない。

菅自はこの夜、閣僚らが集まつた。(敬称略。年齢、肩書は当時)

力緊急事態宣言を首相が即座に発令する。専門家として政府に助言する役割を担う班自は宣言を出す会合に立ち会う決まりだが、それが一向に始まらない。

「東電が送れって言うから、一生懸命電源車を送ったわけ。着いて『ああ良かった』と思つたりプラグが合わない配電盤もやられてるという。何をやつているのかねと思ったよ」

菅は当時のいら立ちを振り返る。菅はこうして専門家と呼ばれる人々へ不信感を募らせていった。これが後に「官邸の過剰介入」と批判される行動に彼を走らせる事になる。

情報もないまま、手探りで事故対応や住民避難の指揮を執る。闇をさまたげ、計器の見えない飛行機。金電源を喪失した第1原発だけでは、官邸もまた別の暗闇を飛んでい

2011年3月12日、東日本大震災による福島第1原発の事故を受け、記者会見する菅直人首相=首相官邸